

Title	啓蒙とは何か : 『ベルリン月報』誌上の議論を中心に
Author(s)	津田, 保夫
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2001, 1, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/73809">https://doi.org/10.18910/73809</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 啓蒙とは何か

— 『ベルリン月報』誌上の議論を中心に —

津田保夫

## 1 ドイツ啓蒙主義とベルリン

カントは自分たちが生きている時代、すなわち18世紀のことを、「啓蒙の時代」(Zeitalter der Aufklärung)と呼んでいる<sup>1</sup>。これはたしかに18世紀ヨーロッパの思想史の特徴をきわめてよく表現している言葉であろう。しかし、そもそも啓蒙とは何だろうか。この問いはまさに「啓蒙の時代」である18世紀も終わりに近づいた1780年代に、ドイツ啓蒙主義の中心地ともいえるベルリンで発行されていた『ベルリン月報』誌上で提示され、大きな波紋を呼んだ。このことは、思想史的潮流としての啓蒙主義がその終わりの段階に近づいていたときでさえも、啓蒙という言葉がいまだ一般的概念として明確には規定されておらず、曖昧な意味で用いられていたことを物語っている。

日本語の「啓蒙」は翻訳語だが、英語の enlightenment、フランス語の les lumières、ドイツ語の Aufklärung はいずれも明るく照らすことを意味している。そして照らし出す役割を果たすのは理性であり、しばしば光のメタファーと結び付けられた。18世紀にドイツで活躍したダニエル・ホトヴィエツキは「啓蒙」という表題を付けた銅版画で、朝霧の立ちこめる薄暗い田舎道を歩く二人の男たちと遠い山並みの後ろに昇りはじめた太陽が暗い霧を払いのけようとしている様子を描いているが、昇りはじめた朝の太陽は理性であり、それが発する光が迷信の霧を追い払い無知蒙昧の暗闇を明るく照らし出すという、理性の光による啓蒙のメタファーを見事に表現している<sup>2</sup>。そのような意味での理性の光による啓蒙はたんなる思想的運動にとどまらず、政治、経済、社会、宗教、文化などあらゆる分野にわたって行われ、啓蒙主義として一つの時代を代表する全般的な運動となった。しかしその現れ方や時期はそれぞれの国や地域の社会的歴史的条件によって異なっている。

イギリスでは17世紀に市民革命が起こり、議会制民主主義の発達や市民社会の形成が進んでいたため、啓蒙主義運動が起こるのも早かった。哲学の分野ではすでに17世紀初めにフランシス・ベーコンが「知は力なり」と述べて知性の時代の到来を告げ、政治思想の分野では17世紀半ばにトーマス・ホブズが自然権や社会契約思想に基づく国家理論を提示して啓蒙主義運動の先駆となり、自然科学の分野ではニュートンによって万有引力の法則に代表される新しい力学的自然観が生み出された。そのような潮流の中で、ジョン・ロックは様々な分野できわめて重要な役割を果たしている。彼は認識論の分野ではあらゆる独断や偏見の排除を目指して経験論を主張し、社会思想の分野では自然法や権力分立の考えを展開した。18世紀にはいると、経験論はバークリーやヒュームによって引き継がれ、経済学の分野ではアダム・スミスが『国富論』などを著し、また宗教

では理神論や寛容の思想が現れ、道徳思想ではシャフツベリーやファーガソンらスコットランド啓蒙主義者たちが感情をも重視した道徳の理論を展開した。

一方、フランスは絶対王政が続いていたため、イギリスに比べて市民社会の形成は遅れていたが、ルソーの社会契約論やモンテスキューの三権分立論に代表されるフランス啓蒙主義の社会思想は、やがて絶対王政を倒すフランス革命の原動力となっていく。哲学の分野では17世紀にはデカルトに代表される合理論の潮流があったが、18世紀にはいるとイギリスからの経験論の影響を受けて、コンディヤックやエルヴェシウスらの感覚論、ラ・メトリーやドルバックらの唯物論が現れてきた。それらの思想は宗教の分野では無神論へとつながっていく。また、ヴォルテールやデイドロ、ダランベールといった百科全書派の思想家たちの活躍も忘れてはならないだろう。

このように、イギリスやフランスでは早くから多くの思想家たちによって啓蒙主義運動が推進されていたが、それではドイツの事情はどうだろうか。17世紀前半に三十年戦争によって国土が荒廃したドイツは社会的経済的に大きなダメージを受け、国家機構の上では神聖ローマ帝国が形式上存続していたけれども、事実上は小国分立状態が続いており、イギリスやフランスに比べて近代市民社会の形成が大きく立ち遅れていた。学問の分野では17世紀終わりから18世紀初めにかけてライプニッツが独自の思想を展開し、トマジウスはドイツ語で哲学することを行い、また彼らを引き継いだバウムガルテンやヴォルフらの活躍も見落とすことはできないが、啓蒙主義が全般的な運動としてドイツで盛んになってゆくのはまだまだ先であった。

ドイツが何よりも遅れていたのは、啓蒙主義運動が発展するための社会的経済的基盤の整備であった。しかし、それがドイツの中でもっとも進んでいたのがプロイセンである。プロイセンはすでに17世紀のフリードリヒ・ヴィルヘルム大選帝侯の時代から常設軍の設置や税制の強化など国力の増大に努め、1701年には公国から王国へと昇格し、その後も軍事面でも行財政面でも改革が成功して、近代的な国家体制を整備しつつあった<sup>3</sup>。そして1740年にフリードリヒ2世(大王)が即位すると、プロイセンは平凡なドイツの一領邦からヨーロッパの大国へと成長する。フリードリヒ2世は軍事および行財政改革をさらに推進して絶対主義国家としての基盤を固める一方で、フランスの啓蒙主義者ヴォルテールを招き入れるなどして、とくにフランスの啓蒙思想を取り入れ、学芸や文化も保護育成した。市民社会形成が立ち遅れたドイツでは、啓蒙主義運動はこのようないわゆる啓蒙絶対主義という形をとって、君主による上からの啓蒙として行われることになったのである。こうしてフリードリヒ2世はドイツ啓蒙主義運動を促進しており、カントは「啓蒙の時代」を「フリードリヒの世紀」(das Jahrhundert Friederichs)<sup>4</sup>とも呼び、この啓蒙君主に対して敬意を払っている。

こうした状況の中、フリードリヒ2世統治下のプロイセンの中心都市ベルリンで啓蒙主義運動が隆盛するのはいわば当然の成り行きであった。ベルリンではすでに1700年にライプニッツの働きかけによってベルリン科学アカデミーが設立され、ドイツの学問の中心ともなった。このベルリン科学アカデミーはその後、哲学者ヴォルフをハレ大学から追放した軍人王フリードリヒ・ヴィルヘルム1世によって一時衰退させられるが、フリードリヒ2世の統治下で再び復興を遂げる。彼は追放されていたヴォルフを再びハレ大学に呼び戻し、また高名な数学者モーペルテュイを招聘してアカデミー再建を託したのである<sup>5</sup>。

こうしてフリードリヒ2世が統治した18世紀半ば以降、ベルリンはドイツ啓蒙主義運動の一大中心地となり、多くの啓蒙主義者たちが活躍したが、その中でもとくに重要な人物はフリードリヒ・ニコライとモーゼス・メンデルスゾーンであろう。ニコライは思想家や作家としては後世あまり高い評価は受けていないが、いくつかの重要な雑誌を発行して、啓蒙主義運動に大きな影響を及ぼした。たとえば彼が発行した『一般ドイツ文庫』(Allgemeine Deutsche Bibliothek)という一種の書評専門誌では1765年から1806年までの間に約8万の本が紹介されたという<sup>6</sup>。またそのほかにも、『文芸美術文庫』(Bibliothek der schönen Wissenschaften und freien Künste)や『最新文学通信』(Briefe, die neueste Literatur betreffend)などを発行し、精力的な批評活動を行った。モーゼス・メンデルスゾーンはレッシングの戯曲『賢人ナータン』のモデルと言われるユダヤ人啓蒙思想家で、彼がユダヤ人解放のために果たした役割は大きい<sup>7</sup>。彼はまたニコライの『文芸美術文庫』や『最新文学通信』に協力するとともに、『感情に関する書簡』や『フェードン、魂の不死について』などの著作でも有名である。また、ニコライやメンデルスゾーンと親交を結び、『最新文学通信』にも協力しているドイツの代表的啓蒙主義者レッシングが18世紀半ばに約6年間ベルリンに住んでいたことも忘れてはならないだろう。

ニコライの例からもわかるように、当時の啓蒙主義運動の重要な手段となっていたのが、新聞・雑誌類だった。18世紀後半になると、ドイツでも書籍出版数は飛躍的に伸び、新聞・雑誌といったメディアも一般化して、より多くの読者が得られるようになり、それによって啓蒙主義に多くの人々が関与することが可能になってきたのである。たとえば、1765年から1790年までの間に発行された雑誌は2千誌にも達し、そのうち1780年代だけで1225誌が発行されているという<sup>8</sup>。そのような啓蒙主義の活動にとってきわめて好条件が整った時期と場所、すなわち1780年代のベルリンにおいて、啓蒙主義の機関誌ともいえる一つの雑誌が創刊された。それが『ベルリン月報』である。

## 2 『ベルリン月報』と水曜会

『ベルリン月報』はヨーハン・エーリヒ・ビースターとフリードリヒ・ゲーディケという二人の啓蒙主義者によって1783年に創刊された。1749年生まれのエーリヒ・ビースターは、ニコライの斡旋によって当時のプロイセンの文部大臣ツェドリッツ男爵の私設秘書となり、後にはまたプロイセン王立図書館長となって、政治や文学の分野で活躍し、『ベルリン月報』には自らも多くの論文を寄稿して、その中心的役割を果たした。一方、ビースターより4歳年下のゲーディケはギムナジウムの校長を務め、プロイセンの教育改革の分野で様々な業績を上げた人物であるが、『ベルリン月報』刊行に関しては自ら精力的に寄稿するよりも、むしろビースターを補佐する役割だったらしい<sup>9</sup>。

彼らの周囲には、著名な哲学者や神学者、教育者、政治家などが集まり、『ベルリン月報』創刊と同じ年に「啓蒙友の会」(Gesellschaft von Freunden der Aufklärung)という会が結成された。この会は冬には第2水曜日、夏には第4水曜日に、会員の自宅で順番に会合を開いていたので、「水曜会」(Mittwochsgesellschaft)と呼ばれ、むしろこちらの名称の方でよく知られている。当時はこのような結社(Gesellschaft)、あるいはサークルやサロンなどが数多く存在し、そこでは様々な問題に

関して意見交換や議論が行われたり、あるいは外部に向けての社会的啓蒙活動が行われたりして、啓蒙主義運動を支えていたのである<sup>10</sup>。

この水曜会はビースターが書記を務め、会員は初めは12名だったが後に24名になり、中にはビースターやゲーディケの他に、メンデルスゾーン(名誉会員として参加)やニコライ、シュパルディング、エンゲル、ドーム、ツェルナー、さらには官僚のスヴァレツやクラインなども加わり、哲学や宗教、教育、政治、社会問題に至るまで、啓蒙に関連する幅広い分野で様々な話題について自由に意見を交換しあった。そして彼らのほとんどは同時に『ベルリン月報』への寄稿者でもあり、そこに掲載された論文には水曜会での議論に基づくものも多く、後に触れるメンデルスゾーンによる「啓蒙とは何か」という問いに対する見解もその一つであった<sup>11</sup>。

水曜会は「啓蒙友の会」という正式名称が明示しているとおり、自由な討論や意見交換によって啓蒙運動の推進を推進することを目的としていたが、その点は雑誌『ベルリン月報』も同じであった。しかし、水曜会があくまでも会員制の結社であり、秘密保持の原則など閉鎖的な性格も持っていたのに対し、『ベルリン月報』は、たとえば遠く離れたケーニヒスベルク在住のカントなども寄稿し、その影響はより広い範囲に及んでいたといえる。

『ベルリン月報』創刊号冒頭の創刊の辞には控えめながら、「真理への熱意」と「有益な啓蒙の普及および有害な誤謬の排除への好意」、「役に立つ企画の確信」によってそれに価値を与えることへの希望が述べられ、掲載する論文のテーマとして次の8種類が挙げられている。1) 一般的に注目に値し、非専門家にとっても興味深いような、学問のあらゆる分野からの報告、とくに最近の新しい発見に関するもの。2) 諸民族およびその風俗習慣の記述、とくに望ましいのは我々に近い国々のもの。3) 人間に関するすべてのこと、また我々が自分自身や同胞のことをよりよく知ることができるようなすべてのことに関する観察、4) 注目に値する人物、とくにまだ功績相応には知られていない人物に関する伝記的報告。5) 新旧の時代のドイツ語およびドイツ文学の知識と教育に貢献する論文。6) 重要な、まだあまりに利用されていない古代の名作の翻訳。7) 珍しく注目に値する外国の文献の要約。8) 我々の計画に同調する様々な種類や内容の論文<sup>12</sup>。

これを見ると、扱われるテーマとしてはありとあらゆる分野が対象となっているが、「注目に値する」(merkwürdig)ものということが共通して重要な要素であることがわかる。そして、その後実際に掲載された論文で扱われるテーマも非常に多岐の分野にわたっているが、いずれも当時の人々にとってきわめてアクチュアルな問題ばかりだったのである。しかし、同じテーマであってもまったく見解の異なる論文、あるいはそれらに対する反論なども掲載されており、その意味ではたしかに『ベルリン月報』は、特定の主義主張を宣伝するための雑誌ではなく、むしろ「討論のための機関誌」(Diskussionsorgan)<sup>13</sup>であったといえるだろう。

こうして創刊された『ベルリン月報』は、当時の著名な啓蒙主義者たちから多くの寄稿が集まり、順調に刊行を続けていき、ドイツにおける啓蒙主義運動を大きく推進する役割を果たした。しかし、啓蒙君主フリードリヒ2世が1786年8月に逝去し、1788年7月に文部大臣ツェドリッツ男爵が退任すると、啓蒙思想を危険視するヴェルナーが後任の文部大臣に就任し、いわゆる「ヴェルナーの反動」が始まり、思想や言論の統制および検閲の強化が行われたのである。なによりも自由な言論に

よる啓蒙活動を主眼とする『ベルリン月報』はヴェルナーから敵視され、それによって大きな存続の危機に見舞われる。1791年には発行人の一人であったゲーディケが編集から身を退き、翌1792年からは発行所をベルリンからイェーナやデッサウなど他邦に移さなければならなくなる。その後『ベルリン月報』は1796年にビースターが「読者との訣別」の辞を述べていったん廃刊となるが、しかし1797年からは『ベルリン雑誌』(Berlinische Blätter)、1799年からは『新ベルリン月報』(Neue Berlinische Monatsschrift)と名称を変えながらも、1811年まで存続するのである。

### 3 「啓蒙とは何か」の問いの発端と背景

『ベルリン月報』誌上で「啓蒙とは何か」という根本的な問いが発せられたのは、創刊と同じ年である1783年の12月に発表されたフリードリヒ・ツェルナーの論文『婚姻の絆をもはや宗教によって認可しないことは推奨されるべきか』においてであった。しかしこの問いは議論の中心的問題として提示されたのではなく、終わりの方の小さな脚注の中で、まったく付随的に控えめに発せられたものにすぎなかった。しかがって、この「啓蒙とは何か」という問いの意味とその後の議論を正しく理解するためには、この発問の背景を把握しておかなければならない。

ツェルナーのこの論文は、同じ年の9月に『ベルリン月報』誌上に掲載された『婚姻の成立の際にもはや聖職者の手を煩わさないようにする提案』という論文に対する反論として書かれたものである。この後者の論文は、E.v.K という匿名で発表されているが、執筆者はビースターだと推測されている<sup>14</sup>。その中で論者は、婚姻は契約の一つにすぎず、その遵守のために何らかの形式的な要件が必要なことは認めるが、宗教の介入、少なくとも聖職者の介入の必要はないと述べる<sup>15</sup>。そして、「啓蒙された人々にとって、そのような儀式はすべて必要ではない<sup>16</sup>」と主張し、啓蒙という名において、聖職者立ち会いの儀式を必要としない市民婚(Zivilhe)を推奨するのである。しかし、彼が否定するのは、聖職者たちが市民生活に不当に介入して支配したがる傾向や形骸化した儀式であって、宗教全般ではない。彼はむしろ市民の義務と信仰の結合、市民社会としての国家と宗教の融和、つまり法律が神の力と同等に尊重されることを望んでいるのである<sup>17</sup>。しかし、後半には内縁婚(Konkubinatshe)の肯定にまで進展する彼の議論は、多くの反発や反論を引き起こすことになった。ツェルナーの論文もその中の一つである。

ツェルナーは、婚姻がきわめて重要なものであり、また他の私法上の契約とは異なり家庭内の問題であるため国家が介入しにくい性質をもっており、その遵守は結局当事者の良心に委ねられる部分が大きく、したがって宗教による認可は有効だと反論する<sup>18</sup>。その際に彼は同時に、とくにフランスの自由思想(リベルティナージュ)の影響などによる昨今の道徳や風俗の退廃を嘆き、そのような時代に婚姻の制度を守るには、たとえ外形的であっても宗教的な神聖さを付与することが必要なのであり、また婚姻などによる家族の絆こそが国民の絆の土台で、それによって愛国心も育成されると主張するのである。さらに彼は、そのような道徳的退廃が「啓蒙」の名の下にますます進んでいくことを危惧する。「もし道徳の第一の原則が揺るがされ、宗教の価値が貶められ、啓蒙の名の下に人々の知性や心情が混乱させられるような力強い方策がさらに用いられるならば、説教も授業

ますます効果がなくなることを危惧しなければならないだろう。<sup>19</sup> そしてまさにこの「啓蒙の名の下に」の箇所につけられた脚注で、「啓蒙とは何か」の問いが発せられるのである。「啓蒙とは何か。この問いはほとんど真理とは何かという問いと同じぐらい重要で、啓蒙を始める前に答えられるべきものだろう。しかし私はこの問いが答えられたのをまだどこにも見たことがない。<sup>20</sup>」このようなコンテキストの中で読むと、ここで発せられた「啓蒙とは何か」の問いの意味がよくわかる。理性の光によって無知蒙昧の闇を明るく照らし出すこととしての啓蒙は、既存の宗教や道徳の分野にも懐疑の目を向け、フランスではドルバックやラ・メトリー、エルヴェシウスらの極端な唯物論や無神論を生みだし、市民の中には神への信仰やそれに基づく道徳を一切否定して放蕩生活に走るリベルタンも多く出現した。しかしドイツでは、フランスからのそのような傾向の影響に対する反発は啓蒙主義者たちの間でもきわめて強かった。ドイツには理性を重視する啓蒙主義と並んで、敬虔主義の流れを汲み感情を重視する感傷主義(Empfindsamkeit)の動きもあったが、この両者は互いに排除しあうものではなく、むしろ補完しあうものあって、啓蒙主義者たちの多くは感情や感性といった問題を無視するのではなく理性と融和させることによって、信仰や道徳も尊重しつつ啓蒙主義運動を推進しようとしていたのである。

彼らにとって、リベルタンのように信仰や道徳、あるいは自然な感情に基づく家族の情愛などを啓蒙の名の下に否定して放蕩生活をするのは、まさしく啓蒙の誤用にほかならなかった<sup>21</sup>。しかし現実に、啓蒙主義運動全般が善良な市民の知性や心情を惑わし道徳的退廃を助長していると考え、啓蒙を有害で危険なものだと見なす人々も少なからず存在していたのである<sup>22</sup>。そこで、啓蒙主義運動を推進していくためには、真の啓蒙とは何かを明らかにして、誤用された啓蒙の名の下に蔓延しようとしている道徳的退廃を阻止し、そのような誤解を解消する必要がある。その意味では、「啓蒙とは何か」の問いは、啓蒙の自己弁護の必要性をも表していたといえるだろう。

#### 4 メンデルスゾーンの『啓蒙するとはいかなることかという問いについて』

以上のように「啓蒙とは何か」の問いの背景を探ってみると、それはももとは「婚姻の絆をもちや宗教によって認可しないことは推奨されるべきか」というきわめて具体的かつ個別的な問題に関連して、目立たない脚注の中で控えめに何気なく発せられた問いであったが、それが啓蒙主義運動の存続に関わる重大な根本的問題であったことがわかる<sup>23</sup>。そしてこの問題の重要性を認識し、最初に意見を掲載したのはメンデルスゾーンだった。彼は1784年9月に『啓蒙するとはいかなることかという問いについて』と題する論文を『ベルリン月報』誌上に発表し、そこでこの問題を論じているが、その議論の主な要点を次の3つに分類することができるだろう。1) 「啓蒙」(Aufklärung)、「文化」(Kultur)、「教養」(Bildung)という3つの類似概念の区別とそれらの相互関係。2) 「人間の使命」(die Bestimmung des Menschen)との関係。3) いわゆる啓蒙による道徳的退廃の問題。

メンデルスゾーンはまず、「啓蒙」という語が「文化」や「教養」という語と並んで、まだ民衆の間には定着していない新しい言葉であることを指摘し、まずこれらの類似概念の相互関係を明らかにしようとする。彼によると、啓蒙も文化も教養も社交生活の変種であり、人間がその社会的状態をより

よくしようとする努力の作用である。その中で上位概念をなすのが教養であり、それが実践的なものとしての文化と、理論的なものとしての啓蒙に分けられるのである。たとえば、工芸品や芸術作品の美しさや技巧、社交生活の洗練された慣習などは文化に属し、理性的認識や理性的思考の熟達 は啓蒙に属するものとなる<sup>24</sup>。

しかし彼はその際に「人間の使命」という概念を持ちだし、教養も文化も啓蒙も人間の使命に適合しなければならないとし、人間の使命こそ「われわれのあらゆる努力の尺度にして目標<sup>25</sup>」であると述べるのである。この人間の使命という問題は、ヨーハン・ヨアヒム・シュバルディング<sup>26</sup>が 1748 年に『人間の使命に関する考察』<sup>27</sup>という本で扱っているのだが、その中で彼は人生の目的について感性的な快楽から考察を始め、精神の満足や美德、より高次の秩序の存在へと移行し、そして最後には魂の不死や神の存在の確信へと至っている。これは神学的なテーマを人間学的に基礎付けようとした試みともいえるのだが、この本は当時大変な反響を呼び、1794 年までに何度も増補改訂を重ねながら 13 回も版を重ねるベストセラーとなった。それ以来、人間使命論は 18 世紀後半のドイツで非常に好んで取り上げられるテーマとなり、メンデルスゾーンはもちろんのこと、他にもたとえば若きシラー、その師アーベル、またフィヒテなどもこの問題を扱っている<sup>28</sup>。

それではメンデルスゾーンは人間の使命とは何であると考えていたのだろうか。その内実については彼はこの論文の中ではほとんど何も述べていない。しかし他のいくつかの著作の中でこの問題について論じており、ノルベルト・ヒンスケはそれを次の4つの点に整理している<sup>29</sup>。1) 人間はそれぞれ異なっており、各自それぞれ自分自身の使命を認識し果たしていくことが人生の最も重要な課題の一つである。2) しかしながら、そのような個人の相違を超えた人間存在に共通する根本的性質というものがある。それは、人間は抵抗によって成長する存在であり、現実の様々な障害の中で鍛えることによって、自分の可能性や能力や才能を発展させる存在だということである。3) 人間の能力のあらゆる育成は完全性へと向かうものである。しかし完全性とはその本質からして真善美を意味している。したがって、人間はすべて「真理を探究し、美を愛し、善を欲して最善をなす<sup>30</sup>」ように命じられている。4) 人間の使命は無限の発展へと向かっている。ヒンスケは以上の4点をメンデルスゾーンの人間の使命の内実に関する見解としてまとめ、それは水曜会の会員たちにとっても多かれ少なかれ共通の理解となっていたであろうと推測するのである<sup>31</sup>。メンデルスゾーンのこの人間使命論の根底には、人間が完全性へと向かって無限に成長していく存在だという考えがあり、それは魂の不滅や神の存在を前提としており、啓蒙の名における道徳的退廃の元になっている無神論や唯物論を否定しているものといえよう。メンデルスゾーンはそのような人間使命観を教養、文化、啓蒙の概念の基礎とするのである。

彼はそれからさらに、人間の使命を「市民としての人間の使命」と「人間としての人間の使命」の二つに分類する。このうち、市民、すなわち社会の構成員としての人間の使命は身分や職業などの社会的役割によって規定されるため、個人によって異なっているが、人間としての人間の使命の方は身分による相違はなく普遍的である。それに応じて啓蒙や文化も「市民としての人間の使命」に対応するものと「人間としての人間の使命」に対応するものの二種類にそれぞれ分類される。そこで問題になるのが、この二種類の啓蒙や文化が対立する場合である。「人間の啓蒙が市民の啓蒙



と対立する場合があります<sup>32</sup>」と彼は述べる。つまり、「人間としての人間にとっては有益なある種の真理が、市民としての彼にとっては有害である場合が時としてありうる<sup>33</sup>」というのである。さらに彼は、本質的な人間の使命と本質外的な人間の使命との区分も行い、そこでもこのような対立が生じるといふ。そしてそのような対立に、彼は啓蒙の誤用による道徳的退廃の原因を見いだすのである。

ではそのような問題に対してどう対処すればよいのだろうか。メンデルスゾーンは啓蒙の行き過ぎを抑制することによって妥協点を探ろうとする。「もし人間の本質的使命が不幸にもその本質外的使命と対立してしまったならば、もし人間に有益なある真実を広めることによって人間にすでに根付いている宗教や道徳の原則が破棄されることになるならば、美德を愛する啓蒙主義者たちは思慮深く振舞い、むしろ偏見を容認する方を選んで、その偏見ときわめて深く結びついている真理を放逐したりはしないだろう。(中略) ここでも正しい使用を誤用から区別する境界線を見いだすのは困難であるが、しかし不可能ではない。<sup>34</sup>」つまり、メンデルスゾーンにとっては啓蒙においても中庸が大事なのであって、バランスを欠いた過度の啓蒙は啓蒙の誤用であり、より悪い結果をもたらすのである。「完全なときに高貴なものほど腐敗したときにはおぞましい、とあるヘブライの作家は言っている。腐った木は腐った花ほど厭わしくはなく、腐った花も腐った動物ほど醜悪ではないが、腐った動物も腐った人間ほどおぞましくはない。文化や啓蒙も同じである。全盛期に高貴なものほど、腐敗時には嫌悪すべきものとなる。<sup>35</sup>」

さらに彼は、啓蒙や文化の誤用による腐敗状況を次のように記述する。「啓蒙の誤用は道徳的感情を弱め、頑迷やエゴイズム、不信心や無秩序へとつながる。文化の誤用は虚飾や偽善、柔弱や迷信、隷従をもたらす。<sup>36</sup>」そして、「啓蒙と文化が歩調を合わせてゆくなれば、それは互いに腐敗に対する最良の防御策となる<sup>37</sup>」というのである。このように啓蒙と文化による道徳的退廃の問題を分析したメンデルスゾーンは、次のように警告して論を締めくくっている。「教養によって国民的幸福の頂点に達した国民は、まさにそれより高く上昇しようがないがゆえに、転落の危機にさらされているのだ。<sup>38</sup>」

## 5. カントの『啓蒙とは何かという問いへの答え』

メンデルスゾーンより3ヶ月遅れて「啓蒙とは何か」という問いに対する答えを発表したのは、ベルリンから遠く離れたケーニヒスベルクに住むカントだった。『ベルリン月報』の1784年12月号に掲載された『啓蒙とは何かという問いへの答え』と題する論文の中でカントは「啓蒙とは何か」という問いに対して、冒頭で次のように答えている。「啓蒙とは人間が自ら招いている未成年状態から抜け出すことである。未成年状態とは他人の指導がなければ自分自身の悟性を使用できない状態である。その原因が悟性の欠如にあるのではなく、他人の指導なしに悟性を使用しようとする決意と勇気の欠如にあるとするならば、この未成年状態の原因は自分自身にあるのだ。それゆえ、アエテ賢カレ(Sapere aude!)、自分自身の悟性を使用する勇気を持って。これが啓蒙の標語である。<sup>39</sup>」

啓蒙を未成年状態からの脱出、すなわち悟性を他人の指導なく自力で使用するものと定義するカントの答えは、「人間の使命」という哲学的な議論に立脚した前出のメンデルスゾーンの答えと比

べてもきわめて明快であり、そのためか今日に至るまでドイツ啓蒙主義による啓蒙概念の代表的定義であるかのような扱いを受けているように思われる。しかし、このカントの答えには、「啓蒙とは何か」の問いが発せられたツェルナーの論文のコンテキスト、あるいはそれに関連して当時のベルリンの啓蒙主義者たち、とくに水曜会の会員たちの間ではある程度共通の問題としてあったであろう啓蒙の誤用による道徳的退廃に対する問題意識がほとんど欠落している。

「啓蒙とは何か」という問題を扱うさいに、ツェルナーやメンデルスゾーンなどベルリンの啓蒙主義者たちの多くが啓蒙の誤用による道徳的退廃などの弊害の問題を重視したのに対して、ケーニヒスベルクに住むカントは多くの民衆がまだ啓蒙されていないという点に重点を置く<sup>40</sup>。ここにはもちろん当時すでに大都市となっていたベルリンと地方小都市にとどまっていたケーニヒスベルグの社会的背景の相違も見ることができるだろう。カントは『啓蒙とは何かという問いへの答え』の原稿を書き終えた日に、『ビュッシング週報』誌上の広告で『ベルリン月報』9月号にメンデルスゾーンの答えが掲載されていることを知り、もしそれを入手していたとしたら自分の原稿の発表を見合わせたかもしれないが、「今となっては両者の思想がどの程度まで偶然に一致しうるか試してみるだけのために<sup>41</sup>」掲載すると述べている。しかしこの問題に対する両者のスタンスの違いから、その結論が大きく異なってくるのはいわば当然のことであった。

カントは民衆がいまだ十分には啓蒙されていないという事実から出発し、その原因を何よりもまず悟性を使用しようとする決意と勇気の欠如に認めている。したがって、彼にとっては啓蒙の誤用による弊害の危険性を警告するよりも、むしろ民衆を啓蒙へと喚起し勇気づけることの方がはるかに重要なのである。そして、啓蒙を危険視するのは、民衆の従属的な未成年状態を都合良しとする後見人すなわち反啓蒙的な支配者側の人間だと告発する<sup>42</sup>。この点でも啓蒙の危険性を啓蒙そのものの中に認めようとするメンデルスゾーンらとの立場の違いが明らかである。

そうしてカントは、そのような支配者と民衆の双方にとって居心地の良い状況の中で、民衆を啓蒙していくのに必要なものが「自由」であると主張する。その中でも「理性を公的に使用する自由」こそもっとも無害な自由であり、啓蒙の促進に必要不可欠であるとするのである。彼は理性の公的使用を私的使用と区別して次のように説明する。「理性の公的使用はいかなるときでも自由でなければならない。それだけが啓蒙を人々の間に実現させることができるのだ。しかし、その私的使用はしばしば非常に狭く制限されてもよい。そうすることによって啓蒙の進歩がとくに妨げられるわけではない。だが私がここで自分自身の理性の公的使用というのは、ある人が学者として読者全体の前で自分の理性を使用することを意味している。私的使用というのは、その人に委託された何らかの公民的地位もしくは職務において、自分自身の理性を使用してもよいことをいう。<sup>43</sup>」

カントによるこのような理性の公的使用と私的使用の区別は、メンデルスゾーンによる「人間としての人間の使命」と「市民としての人間の使命」の区別を思い出させる。しかし、メンデルスゾーンにおいてはその両者の対立が問題となるのに対し、カントの場合は両者の区別はきわめて明確であり、それらの対立は想定されていない。カントは理性の使用の自由を公的使用と私的使用に明確に区分し、私的使用の自由の制限を受認することによって社会の混乱や無秩序を防止し、逆に理性の公的使用には無制限の自由を認めることによって、啓蒙を促進しようとしたのである。こうして

カントは、理性の私的使用は制限しながらも公的使用は最大限に認めているフリードリヒ2世を賞賛し、その「何事についても好きなだけ議論せよ、だが服従せよ」という言葉を容認する。そして、彼はそのような制約をむしろ精神の自由にとって拡充の余地となると見なし、それが国民の意識に徐々に作用して、ついには統治の原則にも影響すると述べて終わるのである。

ここに至ってカントの考えはメンデルスゾーンの考えに若干近づいてきているかのようにも見える。しかし、メンデルスゾーンは啓蒙自体の中にその自己破壊の危険性<sup>44</sup>を認めるのに対し、カントは理性の使用に制限を加えはしても、啓蒙自体は無制限に肯定しているように思われる。そして彼らのそのような啓蒙に対する考え方の根本的相違は、両者の歴史哲学の相違とも関連しており、それはこの「啓蒙とは何か」をめぐる議論から約9年後の1993年9月に『ベルリン月報』誌上に掲載されたカントの論文『理論では正しいかもしれないが実践には役に立たないという通説について』の第3章におけるメンデルスゾーンへの批判の中にも反映されている<sup>45</sup>。すなわち、メンデルスゾーンは性悪説の立場に立ち、歴史的に人類全体は上下に振動するだけで前に進歩することはなく、道徳、宗教、幸福においても同一段階にとどまっていると考えるのに対し、カントは性善説の立場に立ち、人類は絶えず進歩すると考える。このような歴史哲学の相違から、メンデルスゾーンは啓蒙の危険性を指摘するのに対し、カントは啓蒙による人類の進歩を強調するという、両者の啓蒙に対する考え方の相違が生じてきているとも考えられるのである。

## 6 結び

ツェルナーが1783年12月の『ベルリン月報』誌上の論文の目立たない脚注で控えめに提示した「啓蒙とは何か」という問いは、当時を代表する二人の哲学者モーゼス・メンデルスゾーンとカントから、まったく性格の異なる二つの答えを引き出した。この問いに『ベルリン月報』誌上で直接答えを試みたのは、意外にもその二人だけであった<sup>46</sup>。しかし、彼らの答えの中にすでに、ドイツ啓蒙主義内部における啓蒙に対する考え方あるいは自己理解がいかに多種多様であったかが十分に示されているように思われる。

「啓蒙とは何か」という問題に関しては、『ベルリン月報』誌上ではカントの答えをもってその直接的な議論は終わるが、『ベルリン月報』の外部でもさまざまな意見が発表されている。ハーマンは1784年12月18日付のクラウス宛の書簡の中でカントの啓蒙とは何かに関する論文を批判し、またシュロツサーは『啓蒙に関する断章』を、ラインホルトは『啓蒙に関する考察』を1784年にヴィーラントが発行する雑誌『ドイツのメルクアー』に発表し、エンゲルは『啓蒙に関する書簡』を『哲学文芸雑誌』に掲載している<sup>47</sup>。そしてその後も様々な形で、「啓蒙とは何か」という問題には当時の多くの思想家たちが関わってくるのである。今日では「啓蒙とは何か」という問題に関してはカントの見解だけがあまりに中心的に取り上げられているが、このようにして『ベルリン月報』誌上での問いの発端からカントに至る議論の流れを概観してみると、ドイツ啓蒙主義がその歴史的背景の中で抱えていた様々な自己矛盾や問題点などが見えてくる。そしてそのような問題点を当時の多くの啓蒙主義者たちもすでに認識し告発していたことを忘れてはならないだろう。

カントの『啓蒙とは何かという問いへの答え』が発表される前月の『ベルリン月報』に、啓蒙主義を風刺する一つの小さな寓話が匿名で掲載された。これは興味深いことに『ベルリン月報』の合本ではちょうどカントの論文の直前に来ている。さらに興味深いことには、この寓話の作者は「啓蒙とは何か」の問いを發したツェルナーだと推測されている。その『猿』と題した啓蒙主義に対する風刺的寓話を引用して締めくくりたいと思う。

### 猿（一つの寓話）

あるとき一匹の猿が夜中に  
杉林に火をつけて火事を起こした。  
するととても明るくなってきたのを見て、  
猿はたいそう嬉しくなった。  
「おいみんな、おれ様の力を見せてやる。  
おれはな — 夜を昼に変えてやるんだ。」

猿の兄弟たちは大きいのも小さいのも  
みんなやってきて、明るくなっているのに驚いた。  
そして一斉に叫び始めた。  
ハンス兄貴ばんざい。  
「猿のハンスの名は後世に語り継がれるだろう。  
彼はこの地域を啓蒙した（明るく照らした aufgeklärt）のだ。」<sup>48</sup>

---

<sup>1</sup> Immanuel Kant: Die Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung? (In: Norbert Hinske (Hg.): Was ist Aufklärung? Beiträge aus der Berlinischen Monatsschrift. Darmstadt 1990. (以下 Hinske と略記) S.462.)

なお、カントの『啓蒙とは何か』の邦訳については、イマヌエル・カント著 篠田英雄訳 『啓蒙とは何か』（岩波書店 1974年）を参考にした。

<sup>2</sup> ウルリヒ・イム・ホーフ著 成瀬治訳 『啓蒙のヨーロッパ』（平凡社 1998年）16頁以下参照。

<sup>3</sup> プロイセンの近代国家形成の過程については、成瀬治他編 『世界歴史大系 ドイツ史 2』（山川出版社 1996年）45頁以下参照。

<sup>4</sup> Hinske S.462.

<sup>5</sup> ただし、フリードリヒ2世の極度のフランス文化偏重のため、その治世にはアカデミーはフランス人しか受け入れず、主催する講演や公表される著作もフランス語であったという。これについては、マックス・フォン・ベーン著 『ドイツ十八世紀の文化と社会』（三修社 1984年）10頁以下参照。

<sup>6</sup> 『世界歴史大系 ドイツ史 2』（前掲書）148頁参照。

<sup>7</sup> とくにユダヤ人としてのモーゼス・メンデルスゾーンについては、山下肇著 『ドイツ・ユダヤ精神史』（講談社 1995年）62頁以下参照。また、啓蒙主義時代のユダヤ人解放問題については、イム・ホーフ（前掲書）284頁以下参照。

<sup>8</sup> 『世界歴史大系 ドイツ史 2』（前掲書）147頁以下参照。

<sup>9</sup> Hinske S.XX 以下参照。

<sup>10</sup> 啓蒙主義に対する結社等の役割については、イム・ホーフ（前掲書）132頁以下参照。

<sup>11</sup> Hinske S.XXX.参照。

- <sup>12</sup> Ebd. S.3f.  
<sup>13</sup> Ebd. S.XVI.  
<sup>14</sup> Ebd. S.XXXVII.  
<sup>15</sup> Ebd. S.95f.  
<sup>16</sup> Ebd. S.98.  
<sup>17</sup> Ebd. S.99ff.  
<sup>18</sup> Ebd. S.107ff.  
<sup>19</sup> Ebd. S.115.  
<sup>20</sup> Ebd.  
<sup>21</sup> このような啓蒙の誤用による道徳的退廃の事例は、当時の市民劇やその他のジャンルの文学作品でも多く扱われている。たとえばブラーヴェの『神を恐れぬ人』(Der Freigeist)やシラーの『群盗』のフランツの例、『見霊者』の王子の例など。なお、市民劇およびブラーヴェに関しては、南大路振一他編『ドイツ市民劇研究』(三修社1986年)参照。  
<sup>22</sup> たとえば当時の反動的な文部大臣ヴェルナーも1788年の宗教令で、「きわめて濫用されている啓蒙の名の下に」民衆の間に誤謬を広めてはならないと命じている。Hinske S.XXXIII参照。  
<sup>23</sup> なお、ツェルナーの論文が発表されたのと同時期の1783年12月に水曜会の例会で、フリードリヒ2世の侍医でもあったメーゼンの『同胞の啓蒙のために何がなされるべきか』という論文が扱われ、多くの会員がその前提として「啓蒙とは何か」がはっきり規定されなければならないという意見を持ったようである。それについては、Hans-Dietrich Dahnke: Was ist Aufklärung? (In: Debatten und Kontroversen. Literarische Auseinandersetzungen in Deutschland am Ende des 18. Jahrhunderts. Hrsg. von Hans-Dietrich Dahnke und Bernd Leistner. Band 1. Berlin u. Weimar 1989) S. 63ff.  
<sup>24</sup> Hinske S.444f.  
<sup>25</sup> Ebd. S.445f.  
<sup>26</sup> なお、『ベルリン月報』の出版人の一人であったゲーディケはこのシュパルディングの息子たちの家庭教師をしており、息子たちは水曜会のメンバーで『ベルリン月報』の寄稿者でもあった。  
<sup>27</sup> Johann J. Spalding: Die Bestimmung des Menschen. Die Erstausgabe von 1748 und die letzte Auflage von 1794. Hrsg. von Wolfgang Erich Müller. Waltrop 1997.  
<sup>28</sup> シラーやアーベルの人間使命論については、Wolfgang Riedel: Die Anthropologie des Jungen Schiller. Würzburg 1985. S.156ff.参照。フィヒテについては、ヨーハン・ゴットリープ・フィヒテ著 宮崎洋三訳『人間の使命』(岩波書店1989年)参照。なお、「人間の使命」をめぐる当時の議論についてはより詳細な研究が必要であるため、ここでは深く立ち入らず別の機会に譲りたい。  
<sup>29</sup> Hinske S.523ff.  
<sup>30</sup> Ebd. S.528.  
<sup>31</sup> Ebd. S.529.  
<sup>32</sup> Ebd. S.448.  
<sup>33</sup> Ebd.  
<sup>34</sup> Ebd. 449f.  
<sup>35</sup> Ebd.  
<sup>36</sup> Ebd.  
<sup>37</sup> Ebd.  
<sup>38</sup> Ebd.  
<sup>39</sup> Ebd. S.452.  
<sup>40</sup> したがってカントは自分たちの時代を「啓蒙された時代」ではなく、その途上にある「啓蒙の時代」と呼ぶのである。Ebd. S.462.  
<sup>41</sup> Ebd. S.465.  
<sup>42</sup> Ebd. S.453.  
<sup>43</sup> Ebd. S.455f.  
<sup>44</sup> 『ベルリン月報』掲載の様々な論文、とくに上記のメンデルスゾーンの論文に、そのようなアドルノやホルクハイマーの啓蒙の弁証法の考えが先取りされているということは、すでにヒンスケも指摘している。Hinske S.XIIIff.参照。  
<sup>45</sup> Immanuel Kant: Schriften zur Anthropologie, Geschichtsphilosophie, Politik und Pädagogik 1. Frankfurt 1977. S.165ff.  
<sup>46</sup> ただし、間接的にはあるが、1784年以降の『ベルリン月報』誌上でピースターとガルヴェが往復書簡の形の論争の中で、それに関連する問題を扱っている。それについては Hinske S.LVIIIff.参照。しかし、ここでは紙面の都合上、その論争についての考察はやむなく省略した。  
<sup>47</sup> これらの議論についても、ここでは省略せざるをえないが、概略については Dahnke, a.a.O., S.82ff.参照。  
<sup>48</sup> Hinske S.370.